

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391500024		
法人名	医療法人社団 孔和会		
事業所名	グループホーム あかね苑		
所在地	熊本県天草市久玉町5716-9		
自己評価作成日	平成30年1月7日	評価結果市町村受理日	平成30年3月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	平成30年1月31日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域との繋がりを大切にし、地域行事や苑での行事にて交流する事により地域の一員として日々活動している。また母体である病院が同一敷地にあり急な体調変化にも対応でき入居者はもちろんご家族の安心にも繋がっている。また共用型デイサービスを利用し入居者と通所者の交流も図れている。職員の教育にも力を入れ勉強会も積極的に行い全職員のレベルアップを図っている。資格取得の希望者にはできる限りのバックアップで応援している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

近くに、牛深高校・消防署・ふれあい交流センター等があって、海が見える自然環境の中に「あかね苑」がある。2Fは小規模多機能ハウスで、常にホームとの交流があり、職員は協力し合って利用者のニーズに応じたケアに努めている。おいしい食事の提供に力を入れ、食材は地元産を使い、だしの取り方や器にもこだわり、それは利用者の健康保持の元となっている。利用者と地域との交流の場として月2回開催している「よらんかなカフェ」では、体操やゲーム・料理作りを楽しみ、利用者の笑顔を引き出している。日々の暮らしの中で職員は利用者をして一人にしない事を心掛け、何気無い会話で、そばにいる事の安心感に繋げている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員の入居者様に対する想いを理念としており、理念はホールの数か所に掲示し意識づけしている。カンファ時には理念について話す機会を設けている。	利用者の個性を見極め、今、その人が必要としている事を察知してのケアを目指しており、難聴や弱視の利用者への対応や、本人の生活史をふまえたケアが実践されている。又、家族や地域の人の訪問を歓迎し、地域の一員としての交流に力を入れている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域行事(文化祭・夏まつり・芋掘り・どんど焼き)を始め様々な所へ出掛けたり、あかね苑での行事への案内など通じ交流している。また日常の活動の様子を広報誌「あかね丸」を配布している。	認知症カフェ「よらんかなカフェ」では、体操や料理作り等を行っており、地域住民の集いの場として定着してきている。また、毎年「ふれあいセンター」で開催される文化祭に利用者の作品を出品したり、2か月に一度発行の広報誌「あかね丸」を学校・公民館・消防署・警察等、幅広く配布して、ホームへの理解を深めてもらうよう努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	キャラバンメイトによる認知症についての理解や地域で支える必要性などサポーター養成に努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	日々の活動や取り組みについて報告したり今後の予定など話し委員の方への参加も促しその時々でも意見を聞いている。	運営推進会議は、グループホーム・共用型デイサービス・小規模多機能ハウスの3事業合同で、2か月に一度開催されている。委員は区長・老人会長・地域振興会長・民生委員・消防分団長・婦人会長・家族代表・地域包括支援センターなど多様な人材で構成され、それぞれの立場での質疑応答が議事録に記載されている。管理者は推進会議は委員の学びの場でもあると捉えており、職員が研修で学んだ「身体拘束」についてもパワーポイントで紹介し、ホーム運営への理解に繋げている。	委員から、ホームの食事試食の要望があつているとの事であり、実現され、委員の感想・意見等が、更においしく楽しい食事の提供に活かされる事を期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	メールでのやり取りや運営推進会議に包括支援センターからの出席もあり意見交換を行っている。	運営推進会議には毎回、地域包括から出席があり、老々介護の実態や法改正による問題点等の情報提供があり、意見交換をしている。管理者は毎月、利用者に関する手続き等で市役所を訪問し、その際に必要な情報交換を行っており、協力関係が築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人内の勉強会など拘束に対する知識を高めたり入居者が嫌な事は拘束と考える。また玄関の施錠は防犯目的以外には行わない。	身体拘束についての外部研修・法人内研修が行われており、運営推進会議でも研修内容が報告されている。「身体拘束とは？」という基本的な学びから、地域(推進員)も巻き込んだ全職員への周知が図られている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内外での研修や其々の経験をカンファ時に話したり、虐待を見逃さないような意識付けを行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内外での研修会に参加したり、社会福祉士に相談したりできる体制を作っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に契約書と重要事項説明を行い質問、疑問を受け付け納得の上での入居に心掛けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご意見箱を設置したり、ご家族の面会があった時など要望を聞いている。要望はスタッフで話し合ったり理事長に相談し対応するシステムがある。	家族の面会時に本人の暮らしぶりを話して、意見や要望を聞く機会としている。面会が少ない家族には来てもらえるような用件を見つけ出し、さりげなく訪問を促す工夫も見られた。誕生会は家族も招待し、本人の笑顔を引き出している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々の業務のなかであったりカンファで出た意見や提案は大事にしできるものは翌日からでも行っている。	カンファレンスでは、お茶やおやつの出し方、水分補給のためのカップの大きさ等、小さな気づきについて職員から意見が出されており、その人に合ったサービスの提供に反映されている。また、掲示物の文字やイラストは得意な職員に依頼するなど、職員の特性を生かした運営が行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎月の管理者会議において自施設の問題点や職員の健康状態などについての報告、意見を出し改善へ向け努力している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外で行われる研修は掲示板に張り出し希望の研修があれば申し出るシステムを取っている。特に認知症研修については管理者からも参加呼びかけをしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会に職員も同席し自施設、他施設の取り組みを公にし訪問などすることにより同業者全体での質の向上を目指している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の訪問と家族を交えた面会を行い本人の要望や安心を確保したうえでの入居を心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人を交えた面談とは別に家族に対する面談を行い要望等について聞き取りそれに添えるよう努力することで信頼関係を築いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族にとって今何が必要かその解決にどのサービスを利用すれば解決出来るかを見極め他の事業所を紹介したり、法人内のネットワーク会議に出し意見を求めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	施設内の軽作業など職員と共に行い、若い職員には昔の言い伝えや地元の風習など教えを問い共に生活している関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	地域や苑でに行事など通じ家族へ参加を促し共に参加。家族の顔がいつも見れる環境に努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	自宅近くでの行事や季節の花が咲く場所へ出掛けたり知り合いが集まる場所へのドライブを心掛け馴染みがうすれないようにしている。	地元には、昔からいつの間にか人が集まる場所が点在しており、そこに行って馴染みの人との会話を楽しんだり、道路に面したサニールームのソファから外を眺めて通ががりの人に声かけし、お茶を提供する等、自然な形でコミュニケーションがとれている事が確認できた。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	施設内での居場所、席の配置を工夫しスタッフを交え共に支え合う関係作りに努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後も関係が切れないう家族に近況を聞いたり入院なら面会に行く、他施設であっても要件で訪問した場合面会などしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人が常に何を望んでいるかカンファの時間に意見を出し合い、どの様にしたら意向に添えるのか検討している。その人らしい生き方を叶える事を常に考えている。	理念に「言葉にならない想いを受け止める」とあり、カンファレンスで意見を出し合って、一人ひとりが望む暮らしができるよう努めている。訪問時、遅い朝食を摂っている人や、梅と水仙を活ける利用者に寄り添い、言葉かけしながらできない所を手伝う職員の姿が見られた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族の面会が有る時、現在の暮らしぶりを伝えるのはもちろん若い頃からの馴染みや生い立ちなどにも触れ今後の介護にも役立つ情報としている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご本人の生活習慣をできるだけ実現できるよう整えたり残存する能力を把握しお手伝い頂き1日を有意義となるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画作成時点で担当者会議を行い計画の内容を確認している。変更が必要な場合速やかに対応し現状に即したプランに変更している。	3か月に一度のカンファレンスで、評価と計画の見直しを行い、6か月から1年に一回の介護計画作成を原則としている。年間の予定が組まれたカンファレンスと、計画の原案作成時に担当者会議を開き、家族・理事長・ケアマネ・担当職員で話し合いを持ち、現状に即した支援が行われている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	経過記録用紙を用いて日々の様子を記録しその情報は職員間で共有している。変化があれば介護計画見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々々のニーズの変化に対しては法人内の各専門職に相談し助言や指導を仰ぎながら柔軟に対応できる体制を取っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	個々に合わせた資源を見つけ出向っていく。また子供たちの訪問があれば共有する時間を大切に生き生きとした時間作りを支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人はもとよりご家族の希望を最優先とし、かかりつけ医の受診へと繋げている。また受診前には情報提供をする。結果についてはご家族に対し電話や面会時に報告している。	隣接医院の法人代表(理事長)が、全利用者のかかりつけ医となっている。月1回の往診で、一か月前との変化を把握し、職員に日頃の様子を聞いて健康管理に努めている。専門科受診も主治医に相談の上、職員が付き添い、受診後家族に報告する事で、家族の安心と信頼に繋げている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	母体の看護師と施設の看護師で必要な情報は共有できており必要に応じ適切な受診や看護が受けられる体制が取れている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の対応は施設側からのサマリーにて情報提供を行い、病室を見舞うなど本人の安心へと繋げたり早期退院へのお手伝いをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に一応の看取りについては説明しているが、家族会などで繰り返し終末期について話をしている。いざ終末期を迎えた時にはご家族の意向をじっくり聞く時間を作り希望に添った支援に向けて対応している。	入居時に、重度化した際の方針について説明し、本人・家族の意向を確認して「同意書」を取り交わしている。昨年は3度の看取りがあり、小規模多機能ハウスの職員も加わってチーム一丸となり、終末期のケアに取り組んだ。若い職員の中には、精神的な不安や身体的疲労が見られたが貴重な体験となり、その後のケアの質の向上に繋がられている。家族からも感謝の言葉があり、信頼関係が強固になったものと思われる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故対応について勉強会の実施、緊急連絡網により直ぐにバックアップ体制がとれるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の訓練には消防団、地域住民にも参加を頂き避難誘導などの手順や実践訓練を行っている。また非常持ち出しバッグを備えている。	年2回の避難訓練では、利用者が防災頭巾をかぶり、職員が車椅子を押して避難する様子を写真に撮り、推進会議でも報告している。又、「災害時の健康管理」の研修や全職員の連絡網の充実等に取り組んでいる。津波発生時は、隣接の医院の屋上へ避難する事としている。	初めての試みとして、火災時の大量の煙発生時の対応について「避難訓練」を実施したい意向がある。消防署と綿密な打ち合わせを行い、実現される事に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の生活リズムに合わせた行動や身振りでの信号を早くキャッチし優しい言葉かけやプライバシーにも配慮している。	利用者の動きや表情を察知して必要なケアを提供しているが、その際に最も配慮しているのは「大きな声を出さない事」である。聞こえにくい人には、耳元での声かけや筆談で本人の意向を確認し、自己決定を待つ姿勢を大切にしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉で伝わりにくい入居者様には筆談や身振りを交え自己決定を一番として支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者様の生活パターンに合わせ何事もその人らしい生活を優先している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床され洗面、季節に合わせた衣類選択のお手伝い、おしゃれのお手伝いをしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は何より大切で楽しみなものと考え職員と共に作り食す事を前提に考えている。	食事の提供においては、「おいしく食べられること」を一番重要視している。メニューは法人の管理栄養士が作成しているが、利用者によりおいしく食べてもらうため、調理に工夫がみられた。行事食や日頃のおやつも種類を多くし、利用者の楽しみに繋げている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士の立てた献立を基に個々に合わせた形状にして提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアと入歯洗浄を行い清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来る限りトイレでの排泄を基本とし誘導をしている。誘導のタイミングを動きなどから察知できる事も多く失敗を無くす支援をしている。	昼間は、排泄パターンを把握してトイレでの排泄を心掛けている。夜間は、ポータブルトイレを利用する人と紙おむつ・パット併用の利用者があり、排泄に伴う不快感を避けるため、早めの対応ができるよう努力している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々に合わせた予防に取り組み、水分・食事・運動・マッサージ・最後にドラッグと考えている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の頻度は大方決めているが、本人の希望や体調も考慮しながら柔軟に対応している。時間帯も就寝前にも対応している。	入浴は本人の希望に応じて柔軟に対応しており、毎日入浴したり、就寝前の入浴も可能である。全員が浴槽に浸かり、入浴の心地よさを体感してもらう為、車椅子の人は二人介助で入浴補助器具を活用している。また、入浴時に皮膚の状態観察を行い、それぞれが必要としているオイルや塗り薬を脱衣所に準備し、対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	施設内で他入居者様の居室以外は共用スペースで自由に休息されるよう特に決めていない。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は病名の確認と確実な服薬管理に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	趣味や興味のある事については職員と行い世間話などして気分転換の支援をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	地域行事へ出掛けたり、ご家族との外出を促したり天気が良い日や季節ごとにドライブなど出掛け気分転換を図っている。	いつもリビングにいる事は、ストレスになるという思いから、地域行事や牛深中学生との交流会・保育園のお茶会等に積極的に向いている。外出が難しい人は、サンルームのソファで日向ぼっこをしながら外を眺め、気分転換を図っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族の希望もあり現金は施設で管理させてもらい必要時に手渡し自由に使って頂くようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人の希望で電話したりご家族の電話を取り次ぐなど自由に出来る体制である。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用スペースは心和むような空間づくりに努め混乱や不快を感じる事の無いよう掲示物など工夫している。	玄関から長く広がったりリビングにいくつかのテーブルがあり、利用者はそれぞれの居場所できつろぐ姿が見られた。新聞を読んでいる人もある。一段高くなった畳スペースにテレビがあり、壁には日めくりカレンダーやその日の天気が掲示されている。加湿器も数か所に置かれ、乾燥対策にも配慮されており、快適な空間となるよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファでゆっくりくつろいだり、畳スペースで横になったりと自由に使える空間を設けている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室に持ち込まれる家具等は自宅で使い込まれた物を推奨し心地良い居住スペースを目指している。	持ち込みの寝具や、加湿器・人形やぬいぐるみ・衣装ケース等が置かれた部屋や、ベッドではなく床に布団がある部屋、一日の日課表が貼られている部屋等があり、個々に自分の部屋としての温かみを感じられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室の入口には自分の居室と解るような目印があり、日付けの確認は毎日架け替える独自の物を使っている。		